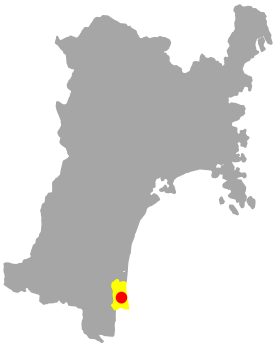
14 あふれだすアイデアと圧倒的な行動力で山元町の「いちご」の復興の先駆けに

1 復興した山元いちご農園の全景　2 いちごワインを製造するワイナリー　3 岩佐代表取締役

（やまもといちごのうえん）
山元いちご農園
株式会社

設立年月日	平成23年６月20日
経営面積	農地面積7.5ha、いちごハウス3.2ha
代表者	岩佐 隆（代表取締役）
構成員等	役員３名、社員30名、パート15名
所在地	山元町山寺字稲実60
TEL	0223-37-4356
WEB	https://www.yamamoto-ichigo.com



活用した主な事業等

・東日本大震災農業生産対策交付金
・農業経営基盤強化資金（スーパーＬ資金）
・山元いちご農園ファンド（応援金含む）
　など

経営作物

いちご（11棟）、ぶどう、メロン

震災から101日目に法人設立

山元いちご農園株式会社の岩佐隆代表取締役は、いちごと水稲を作付けする複合経営をしていたが、東日本大震災で何もかも失った。震災から１、２か月が過ぎ、「代々住んできたこの地域を何とかしたい。何ができるのか」と考えた末、「いちご」に全てを賭けることにした。「個人の再生だけではなく、地域の雇用につながるモデル的な農業を実践するため、将来にわたり若い人たちが受け継ぐことのできる法人化が必要」と考え、平成23年６月20日、若手農家３名と共に、震災からたった101日目のスピードで山元いちご農園を設立した。

平成24年3月には初収穫

「いちご農園の建設にお金が掛かることや様々な事業の申請が大変だということは承知していたが、普及センターや農協から『３年くらい待ったら』と言われたことで、かえって強烈な使命感が湧いてきた」と岩佐代表は当時の胸の内を語る。当時はまだ復興交付金制度の創設前であったために、東日本大震災農業生産対策交付金、スーパーＬ資金、クラウドファンディングなど、利用可能な制度や民間支援を最大限活用し、平成23年８月には総事業費４億８千万円のいちごハウス建設に着手した。自宅近くに所有していた農地は災害危険区域に指定されたことから、内陸側に移設された常磐線沿いの農地2.6ha（現在3.2haに拡大）を地主農家と直接交渉して借り入れた。なお、新しい施設での栽培方法は、労働負担の軽減につながり、早期の収穫が可能となる高設栽培方式とし、2,160㎡のハウス８棟を建設した。平成24年３月には初収穫を行い、復興の先駆けとなった。それに触発されるかのように、近隣で

■ 高設栽培方式による8棟のいちごハウス

もいちご栽培の復活に向けた取組が本格化する。

あふれだすアイデアと圧倒的な行動力

平成25年３月からは、観光いちご農園を開園。その翌年の２月には園内併設のカフェ兼売店「Berry Very Labo」を開店。平成28年８月には３億円をかけて「６次化センター」を設置し、「いちごワイン」の自社醸造を開始。平成29年10月には、神戸で修行したスタッフによるバームクーヘンを製造・販売する「夢工房やまもとバーム」を開店し、バームクーヘン作りが体験できる「一本バーム体験」も始めるなど、岩佐代表のあふれだすアイデアと圧倒的な行動力で短期間のうちに次々と事業を拡大していく。カフェでは、新鮮ないちごをふんだんに活かしたスイーツとともに、「いちごカレー」という大胆なメニューも提供している。岩佐代表自らが考案したものだ。

■バームクーヘン製造中

今は我慢のとき

10年前に掲げた目標は、年商３億円。「当時は途方もない目標と思ったが、遮二無二突っ走り、令和元年には、２億７千万円程度まで達した。そんな矢先にコロナ禍に見舞われた。いちごの生産だけであれば、影響はそれほどでもなかったかもしれないが、人の動きがバッタリ止まった」。新型コロナウイルス感染症の影響はいちご狩りやカフェ、ワイン、バームクーヘン作りなど全てに及んでいる。「生産から加工、販売、観光まで一貫した取組が当社の特徴だが、それがリスクとなった。減収は数千万円。震災のときはとにかく前に進めばよかったが、コロナは先行きを見通せないことが何よりもつらく、今は我慢のとき」と語る。

自分がという思いは、10年前からみじんも変わらない

「アフターコロナの目標は２つある。１つ目は、この被災地を一年中フルーツで楽しめる場にして、人をもっと呼び込みたい。夏はメロン、秋はぶどう、冬と春は当然いちご。２つ目は、地域の復興を加速化するため、農業を通して、今以上に雇用を創出したい。お金を稼ぐだけであれば、ここにはいない」と岩佐代表。いわゆる農福連携にも取り組んでおり、令和２年11月には、Ｂ型就労施設を立ち上げ、６～７名の障害者を受け入れている。

震災から10年間、常に前に進んできた岩佐代表。その原動力を尋ねるとこう語った。「いくら行政が頑張っても、現場でやってくれる人がいないことには動かない。行政がやれることには限りがある。自分が動いて、自分がやらなければという思いは10年前からみじんも変わらない」。

■いちご品種「とちおとめ、べにほっぺ、もういっこ、にこにこベリー」を栽培

経営理念

◆地域農業を牽引し、社会貢献できる企業を目指す

◆農業を通じて、「ひと」を育て、「しごと」を生み出し、「ちいき」をたがやす

復興の軌跡

平成23年
- 東日本大震災
- 山元いちご農園設立
- いちごハウス建設に着手

平成24年
- いちごハウス８棟完成
- いちごの出荷開始

いちごの生産量 40 t

平成25年
- いちご狩り開始
- Berry Very Labo 開店
- いちごワイン委託生産開始

100 t

平成26年

130 t

平成27年

160 t

以後 160～170 t に安定

平成28年
- ６次化センター完成
- いちごワインの自社醸造開始
- 大型いちごハウス完成

平成29年
- 夢工房やまもとバーム開店

平成30年
- 一本バーム体験開始

「東日本大震災からの復興の基本方針」で示された戦略に照らした **経営の特徴**

- ●高付加価値化　いちご加工品等の製造・販売
- ●低コスト化　総合環境制御システムの導入による作業の効率化
- ●経営の多角化　観光農園、カフェ兼売店、いちごワインの醸造、農福連携